

結婚・処女性・出産

—女たちの復活物語(アフリカ, 日本, イスラエル)—

森 真 弓

目 次

1. なぜ女は結婚に耐えられないか
2. 結婚における男の女に対する経済的な支配
3. 女の処女生と出産
4. 涙の援助グループ—エフタの娘の物語
5. 結婚というものの全体像: 女が提案するパートナーシップ

現在世界の人口は65億に達し、この調子で増えつつけることは、人類の生き残りに関わる問題である。貧しい国での高出生率をどう解決するか。国連の人口問題に関する回答は、低められている女の地位を上げることであるとする。これは日本のように富める国においても、低出生率の問題に対する示唆を与えるものではなかろうか。われわれの社会の将来に希望を持つためには、女の地位を改善する新しく創造的な意識が鍵となろう。

この論文では、女が結婚をめぐる死んで行く物語をいくつか取り上げ、新約聖書の「復活」の視点からその死を解釈し直す。そういう女たちの姿を想像的に描き直すことによって、21世紀を生きるこれからの女と男が、量ではなく質の「共生」を達成するためのビジョンを模索する。

1 なぜ女は結婚に耐えられないか

『ブライド・ブライス』はナイジェリアの小説で、その意味は「花嫁の代価」である。いわゆる「結納」であるが、日本の結納は上流階級の政略

結婚がモデルとなっており、男からの結納に女からの支度(持参金)が対応するのに対して、花嫁の代価は、娘が結婚する際にいくらの値がつくかに文字通り集中する。結婚時の娘の父に対する金銭の支払いがブライド・ブライスである。まず、この小説のあらすじを紹介するが、ブライド・ブライスは原語のままを使った。

主人公アクーナはある夫妻の長女だが、彼女の存在は無いも等しかった。両親は彼女の弟を指して「うちには一人息子しかいない」と口癖のように嘆いた。女の子は数にも入らない。この夫妻の喧嘩の原因はいつも、アクーナの母マー・ブラッキーにあった。だれもがそう呼んで親しんでいたマー・ブラッキーは、二人の子どもを産んだあと妊娠が止まった。ナイジェリアの標準から言っても、二人は少な過ぎる。アクーナは家族のなかで母の弱い立場に不安を感じていたため、父に高いブライド・ブライスを払ってくれる裕福な男と結婚することを夢見ていた。

しかし、父は第二次世界大戦での負傷がもとで死んでしまった。そのときアクーナは13歳。残された家族は父の生まれ故郷イブーザに移り、マー・ブラッキーは亡き夫の兄の第四妻として「相続」されたのだった。⁽¹⁾アクーナは苦労しながらも、新しい環境に適応して行った。やがて彼女は親切で優しい教師チーケのいる学校に慰めを見出す。チーケは奴隷の子孫で差別されていた。しかし、チーケの父は進歩的な人で、そういう差別と闘い、財を成していた。それだからこそ人々が嫉妬して、「家柄」にこだわったのかもしれない。日本の部落差別とよく似ている。

アクーナが16歳になったとき、腕ずくでも彼

女と結婚したいという男に、ある夜誘拐されてしまう。切羽詰った彼女は男に自分が処女ではないと告げる。それがその夜の強姦を避ける唯一の方法で、アクーナには後先のことを考える余裕はなかった。案の上、それに仰天したその男はそこを去って行った。この恐ろしい瞬間を危機一髪で逃げ切ったことは、アクーナにとっては幸運だったが、彼女の行く手にはもっと大きい困難が待ちうけていた。イブーザのだれもが次の朝、彼女を軽蔑し非難したのだ。男が、彼女が処女でないことを言いふらしたからである。強姦しようとした男よりも、女が処女ではなかったことを人々は非難した。

この事件は、アクーナのプライド・プライスが無になったことを意味した。それは彼女の家族にとってはこの上ない不名誉だったのだ。しかし、チーケに助けられ、同日アクーナはイブーザから逃亡する。やがて彼女はチーケと結婚し、アクーナがほんとうは処女であったことを、チーケ自らが確認する。その後、アクーナの弟とマー・ブラッキーも、チーケとその父に経済的な援助を受け始める。若い二人はイブーザから7マイル離れたウゲーリで幸せな生活を始めた。

しかし、イブーザではアクーナを誘拐した男が、彼女の逃亡に怒って、今度はアクーナの髪の毛をひと房切り取ったという嘘を言いふらした。これは当地の法律と慣習では、男が女を妻と呼ぶことを保証するもので、女は一生涯その男から離れることができない。しかし、アクーナの家族の肩を持つ者らから抗議の声が上がり、何人かの長老たちが動いて、チーケがアクーナの義理の父にプライド・プライスを払うべきだと決定された。

チーケの父はアクーナのプライド・プライスとして2倍にも4倍にもして払ったかもしれないのに、意外にもアクーナの義理の父はプライド・プライスを受け取ることを拒絶した。その理由は、アクーナが彼の望みを完全に打ち砕いたからだと言う。この事件があつてから、彼の経歴に傷

がつき、チーフという名誉ある地位に推薦されるチャンスが絶たれたらしい。威厳を傷付けられたという恨みは金銭では晴らせないというわけで、義理の父はアクーナそっくりの小さな人形を作り、針でその心臓を貫いた。これもまた日本の「五寸釘」の習慣に似ている。日本の場合、もし、ある人を恨んで殺したいと思えば、その人の家の木に太い釘で人形の心臓を貫いたものを打ちつけるのである。アフリカの場合も、日本の習慣の場合も、それは人形を使って人を呪う方法であった。

アクーナはこのような呪いの人形が自分に向けられていたのを知らなかったが、彼女の健康状態は不思議にどんどん悪くなって行った。妊娠はしたものの、日に日に弱って行くのはどうしようもなかった。結局彼女は、女の子を産んですぐに死んでしまう。その子の名は「ジョイ(喜び)」と名づけられた。この小説の最後を、作者は次のような文章で飾る。

「だから、伝統的な迷信を、知らずとは言え現実のものにして、自分で自分を自滅の方向に導いたのはチーケとアクーナだった。アクーナが死んだ後イブーザでは、生まれてくる女の子全員にこの話が語り伝えられ、古い土地のタブーが強化された。もし女が長生きして子や孫の顔を見たいなら、自分の家族が選んだ男を夫とし、プライド・プライスが確かに払われなければならない。もしプライド・プライスが支払われなかったなら、女は最初の子を生きて産むことはできない。それはすべての若い女たちに、心理的な影響力を持ち、現在に至るまで、どんなに現代化された状況のなかでも、迷信として生き続けている。なぜそうなのかと人は尋ねるだろうか。その答えは自分で考えてみるべきであろう。」⁽⁹⁾

なぜアクーナは自分の夫を自分で選ぶ自由が持てないのか？ ナイジェリアの文化では、女の処女性格が彼女の価値の中心に来る。それは商品価値なのである。女の方から男を選ぶことはできない。彼女が処女でなかったこと(実際

は処女だった),そしてプライド・プライスが支払われなかったこと(実際は受領が拒否された)がこの悲劇を生んだ。実際はすべての条件が満たされた結婚だったのに。

この物語をもう少し分析する前に、日本の民話に出てくる女の話を紹介したい。この女は実は鶴で、人間となったが、また自分の最初の姿に戻って行く話である。アジアには、人間になった動物や鳥が、人といっしょに暮らす物語がたくさんある。仏教の信仰に命の輪廻があり、動物が死ぬと、次の生ではその魂が転生して人間になることが可能である。この物語はそのような信仰を土台にして、人間が物質的な欲望によって失ってはならないもの、鶴が示した愛や恩というものを描いている。1950年代に、木下順二がこの古い民話を舞台劇「夕鶴」にしてから、この鶴の話は日本中でたびたび公演されてきた。

木下の設定によれば、女の名は「つう」と言う。つうは鶴で、「与ひょう」に見つけられたときは傷を負っていた。この若い男は鶴をあわれに思い、身体にささっていた矢を抜いてやった。彼女はそのことに感謝し、与ひょうに恩返しをしに来る。ある日、彼女は美しい女の姿で彼を訪ねてきて、彼の妻にしてほしいと頼む。驚いたが大喜びの与ひょうは、つうと新しい生活を始める。幸せな結婚だった。村を一步も出たことのない貧しい与ひょうは、つうが語る都の話を聞くのが何よりの楽しみとなった。この民話は夫妻の子について何も語らないが、妻は近所の子どもたちとよく遊んでいた。

つうは千羽織りと呼ばれる美しい布を織った。与ひょうはそれが都で高い値で売れることを知った。貧しい男がとたんに金持ちになったので、近所の人々は驚いた。彼女が布を織るとき、夫には仕事場に入らないように、のぞき見もしないようにと言ってあった。彼は妻の言うことを聞いて、それを守っていたが、なぜ彼女が布を織ったあとあんなに疲れるのか、不思議に思った。

ある日、与ひょうの悪友の「惣ど」と「運ず」がやってきて、つうの布を都で今までの10倍にも売ってやろうということになった。与ひょうは儲かるかもしれない金に目がくらんで、つうに布を織ってくれるように頼む。それを持って都に行きたいという夫と、これ以上は織れないという妻の間で言い争いがあったが、彼女が夫の頼みに折れて、これが最後だという約束で布を織り始めた。

しかし、つうが布を織っている間、惣どと運ずが、とうとうその部屋をのぞいてしまう。彼らは一羽の鶴が、痛そうに自分の羽を引き抜いて、布に織りこんでいるのを見たのである。あまりの恐ろしさに驚愕するが、男たちはやっとのことで逃げ出した。与ひょうには二人が何を恐れているのか理解できないまま、つうの邪魔をしてはいけないとだけ願った。

つうはいつもより長い時間、機を織って、二枚の布を仕上げた。一枚は夫の商売のため、もう一枚は自分の記念としてである。多くの羽を失ったので、彼女はもはや、自分が人間の姿をしていることができないことを知っていた。

与ひょうの方も、つうの秘密を知りたい気持ちにとうとう負けてしまう。彼は部屋をのぞいたが、自分の目が信じられなかった。だから、「つうよ、どこさ行ってただ、つうよ。おら、おら、つうがおらんもんで…」と、つうにすがりつく。彼女は夫に布をわたしながら言う。

「あんた…とうとう見てしまったのね…あれほど頼んでおいたのに…あれほど固く約束しておいたのに…あんたはどうして…どうして見てしまったの？…あたしはいつまでもいつまでもあんたといっしょにいたかったのよ。…ほんとにあたしを忘れないでね。その布、一枚だけは、いつまでも大事に持っていてね…だめよ、だめよ、あたしはもう人間の姿をしていることができないの。またもとの空へ、たった一人で帰って行かなきゃならないのよ。…さよなら…元気でね…さよなら…さよなら…⁽³⁾…本当はさよなら…」

与ひょうは泣いて彼女が去っていくのを留め

ようとすが、つうは残った力を振り絞って飛び去って行った。村の人たちは鶴の声を聞き、子どもたちは空高く舞い上がったその姿を見た。つうは人間の結婚に耐えられず、鶴の姿に戻って大空に帰って行った。

このように紹介してきたアフリカと日本の物語は、違っているが、共通した間を浮かび上がらせる。なぜ女たちは結婚のなかで生きられないのか？ 別の言葉で言うと、なぜ女たちは愛のために、自分を犠牲にしなければならないのかと言うことである。

アクーナは父を亡くした後の厳しい生活のなかで、移動、誘拐、逃亡を経験した。そして愛する男と結婚はしたが、生き残れなかった。つうもまた人間の形を維持することができず、犠牲的な愛を夫に与えつつ、姿を消す。これらの女たちは結婚の中で死んで行く。女たちが結婚のなかで自分を生きられないような、家父長制・⁽⁴⁾父権制とは何なのだろうか。

2. 結婚における男の 女に対する経済的な支配

この論文では家父長制や父権制の定義を「注4」にまわした。大まかに言って、男の権利が優先される社会で、女がそれに挑戦すれば、居心地が悪くなるばかりでなく、生きられない場合も多いのだと、ここでは要約しておこう。さて、物語に出てくる個々の現象の分析に移りたい。

まず、ブライド・プライスとは何だろうか？ 息子に高い価値を置きながら、アクーナの村落共同体では娘を卑下した。娘のメリットとはブライド・プライスにのみあると人々は考えた。それがあるからこそ、女の子でも生まれれば歓迎するし、祝福もするというわけである。いつでもアクーナの両親が言い争うとき、父は通常の2倍のブライド・プライスを母のために支払わなければなかったと、悔しそうに言うのだった。マー・ブラッキーにはそれだけの価値があったらしい。女の教育は、高いブライド・プライスを期待するために、父が娘に投資するためのものであったよ

うだ。

日本の結納の考え方は、息子の父が娘の父に対して、仲人を通して払うもので、現在ではその儀式も金額も象徴的なものになっている。地方によっても違いがあり、息子がサラリーマンの2、3ヶ月分を結納として、娘の両親に自分で払うというのを関西で聞いたことがある。いずれにせよ娘の側は、受け取った結納よりもっと高い額の支度をして、結婚式や新居の費用を両家で分担するのである。

日本の場合、長男のところに「嫁に来る」というのが結婚の標準である。都市化と少子化が進み、結婚の実態は大きく変わっているが、「花嫁」という言葉がまだ生きている分だけ、女は自分の家族を離れて男の家族に加わるという意識がある。その場合、男の方は自分の家族に留まって「家長」になる順番を待っている。多くの日本昔話では、子どもの面倒を見るのは祖父母である。子どもは父の家族に属し、その家族の長は祖父で、年齢が進むと隠居して息子に権威を譲る。

わたしの故郷愛媛県では、叔父の代までそのようなことが続いた。敷地には「隠居」があり、そこが「隠居」の住まいであって、叔父の父は老年になって「御母屋」から離れに移った。しかし叔父は息子の結婚の際、離れを大きな鉄筋の2階建てにし、息子夫妻と子どもたちを住まわせている。叔父は古い御母屋を離れないのではないだろうか。実は御母屋もリフォームしている。伝統も、こうして現実的な適応で、どんどん変わって行く。

興味深いのは、伝統的な日本の昔話では両親の存在が薄いばかりか、子どもの母は家族のなかに描かれない。母は使用人の一人のようになって隠れている。

つうの話のなかでは、祖父母も子どももいないが、明らかに彼女は与ひょうの世話を焼いている。彼女の犠牲的な奉仕は、自分の羽を引きぬいて高価な布を織るのも含めて、日本における典型的な「主婦」の姿である。社会全体にお

いて、妻と母の犠牲的な奉仕が強調され、家族の生活の多くの場面でそれが当たり前とされている。つうが与ひょうの親切に対して恩返しをしなければならぬと信じたように、日本の妻たちも意識的にか無意識的にか、毎日の家事によって(内助の功というような美化された表現もある)、自分の夫に何かを返さなければならぬと感じている。日本では多くの女たちが、結婚以外の場所ではよい生活ができるチャンスがないと思っているので、自分の夫はいわば一種の救い主である。このように、妻は結婚によって夫に「救われた」という倒錯に陥りやすい。

アクーナの例でも、彼女はチークに救われたと思っていた。チークが彼女の弟といっしょに住めるよう計らい、マー・ブラッキーにも送金したとき、アクーナは次のようにチークに感謝している。

『まあ、わたしのためにこんなにまでしてくれるの？ わたしは死ぬまであなたに仕えるわ。あなたのよい妻になります。わたしはいつもあなたを愛するわ。来世も、その次に来る世でも愛して、世の終わりまであなたを愛するわ。』彼は笑いながら彼女の髪に顔をうずめた。『そんなことを言うのを人が聞いたら、おまえは⁽⁵⁾お金のためにわたしと結婚したと思われるよ。』

お金では女の忠誠や奉仕を買うことはできないはずであるが、今の結婚制度が常に試みていることは、女の心を買うことではなからうか。実は結婚で救われているのは男の方であろう。男が結婚で失うものは少ない。男は社会的な地位と経済力が保証されている。男は心売る必要もない。だが男が守られている社会の中では、よろいかぶとで男の心が隠れ、何を感じているか不明である印象がある。

これらの二つの物語—ナイジェリアと日本—のなかに、結婚における男の女に対する経済的な支配に抵抗する声はないだろうか？ つうの物語のなかでは、夫の金銭欲を批判している彼女の言葉が印象的である。彼女はなぜ与ひょうがそんなに金銭をほしがるか理解しか

ねており、幸せな生活をするための金銭は充分あると、夫を説得しようとしている。しかし、彼はそんなことには耳を貸さない。つうはもっと金儲けをしようという友だちに誘惑される夫を、悲しそうに見ている。彼女は夫が自分とは違う世界に生きていると感じている。

しかし、彼女はまだ夫に対する信頼を失わず、自分が犠牲的な愛をもっと注げば、彼の心を取り戻せるのではないかと希望を持つ。それがこの物語の悲しいところである。金銭に心を奪われたりしない夫に変えたい(家庭に目を向ける夫になってほしいと願う)という、不可能な望みに挑戦する妻が、自分を見失って行く。人間は他の人間を望むように変えることはできないという真理が厳しい。変えられるのは自分だけである。つうはそれと知ってか、とうとう与ひょうを変えるのをあきらめて去って行く。

アクーナの物語では、彼女がチークと結婚したときには無一物であった。彼女はイブーザから逃げてくることによって、母と弟に恥という借金を負わせてしまったと感じている。だから、チークが伝統的なやり方でブライド・ブライスを払ってくれるかもしれないと、アクーナはチークに期待するところがあったのである。

しかしまた、ブライド・ブライスは伝統的な方法で彼女の義理の父に渡るのではなくて、マー・ブラッキーに支払われるべきだとチークが言ったとき、アクーナはほっとする。そのような意味では、チークはアクーナのよき援助者である。彼女は理解者である夫との生活に安らぎを感じたに違いない。

しかし、もっと深いところにある彼女の問題に触れてみたい。女と生まれたこと自体がアクーナにとっては借金を負っていることであって、それをブライド・ブライスで返さなければならないという、誤った信仰に追いやられて行ったのが、彼女の人生だった。しかし、彼女のブライド・ブライスは、夫となる人の側から自分の父へ(あるいは義理の父へ、または母へ)、支払われるものなのだ。今まで夢に描いてきたブライド

・ブライスなのに、結局彼女はそれには指一本触れられない。しかし、皮肉にも、頭上を素通りするブライド・ブライスこそが、彼女の人生を完全に支配することができたのである。

ブライド・ブライスに関しては、アクーナはまるで奴隷のようである。自分の人生が自分には属していないのだから。わたしがしたい質問はこうである。もし、彼女の存在が彼女に属さないのなら、そもそも自分を犠牲として献げることなどできたのだろうか。と。自由が奪われている奴隷は、自分を持つことが許されないわけだから、自分を犠牲として献げることもできないだろう。アクーナの場合、ブライド・ブライスに縛られてきた人生は、自発的な犠牲ではなく、端的な虐待なのではないのか？ 彼女はそのことに気づいていただろうか？ 家父長・父権制に支えられた人々の考え方や習慣によって、女は虐待されている。

結婚制度のなかで、女は男の利益優先によって搾取される。女の犠牲的な奉仕の行動は、結婚制度のなかではしばしば精神的な虐待の一形態として存在する。

3. 女の処女性と出産

結婚において結実するものは何であろうか？ 子どもを得ることだろうか？ 家父長制・父権制の結婚制度では、多かれ少なかれ女の処女性が商品価値を持ち、それが男に売買される形で(そうあからさまでなくても、構造としては同じ形で)結婚が成立する。それによって女を購買した側の男は、自分の子どもをもうけることになるからである。

しかし、事実としては、女の処女性が必ずしも積極的な価値と見られているとは限らない。日本の民話のなかでは、女の処女性についての話題はほとんど出ない。大事なことは子どもが産めるかどうかである。そのような民話のなかでは、よく老夫婦(たぶん祖父母)に超自然的な方法で赤ちゃんが与えられたりする。「桃太郎」の話が代表的なものであろう。おばあさんが

川で洗濯をしていると、大きな桃が流れてくる。なんとその桃から、桃太郎が生まれたというわけである。

アフリカの結婚でも、出産が大前提だから、不倫などというものは不問にする傾向があると聞いた。とにかく子どもが授かれればよいというわけである。⁽⁶⁾

出産は女にとっては命の源と直接身体でつながる経験であるのに対して、男にとっては、それがたとえ形骸化していようと、社会的な家族の存続と継続である。したがって、「出産のことに関しては、女はそれ自身で価値のある存在なのではなく、目標の手段としての価値として見られる」⁽⁷⁾。女の処女性が貴重だと言うが、それは男の家族が継承されているかどうかという点で大事なのであって、女の存在がそれ自体で貴重だと見られているわけではない。

『アノワ』という女の名前が書名となっているガーナの物語を見てみよう。アノワの唯一の希望は子どもを持つことだった。夫のコフィとの間には長いこと子どもが生まれなかった。彼女はコフィにもう一人の妻を得るようにさえ申し出た⁽⁸⁾が、彼はそれには賛成しなかった。結局、子どもが生まれなかったのはアノワのせいではなく、コフィの方に問題があるとわかった彼女はついに、夫が女には興味を示さないということを発見した。自分のせいではなかったという真実がわかって、アノワは自分を恥じてきた長い年月を後悔し、なぜ真実を自分に告げてくれなかったのかと夫に問い直す。夫とは言え、彼を無二の親友だと彼女は信頼していたのだ。しかし、場面は急展開する。コフィは社会では自分が受け容れないことを悟って自殺する。それを知ったアノワも絶望して池に身投げする。このアノワという悲しい物語では、男も女も、結婚のなかで生き延びられなかった。

特にもし、コフィがセクシュアル・マイノリティであるとしたら、この話はよく筋が通る。同性愛の人たちは結婚という、ほとんど人間の義務のようにになっている制度(実は異性愛者の偏見)

に、対応するすべを持たない。少数者であることを隠して、大多数のなかに紛れ込むには結婚するしかない。ガーナでは特に、同性愛者が生きて行けなかったというのが、この物語の真実かもしれない。

女も男も、たとえ同性愛者であっても、村落共同体のなかで、子どもを産むという責任のプレッシャーに押しつぶされているのが問題であろう。アノワがコフィに言ったように、神のイメージに造られている男と女として、人生を分かち合いながら生きて行けないものか。子どもを生むための夫妻でなくても、女と男として、神の祝福を受けながら、ありのままに生きていけるのではないか。社会の期待に負けないで、彼女は彼と共にそういう理想に生きたかったのがわかる。だがそのメッセージは届かなかった。結婚以外の男女の友情では、コフィは生きて行くことができなかったのだ。したがって、男も、もし同性愛者ならなおさら、結婚制度の被害者であって痛々しい。

いや、そうではなかったかもしれない。残念なコフィの自殺は、子どもがないアノワの悲しみを共有しており、子どものない男女が社会から疎外されることに対する、無言の抵抗の意味があったのかもしれない。

4. 涙の援助グループ

—エフタの娘の物語

それでは、結婚もしない前から死んでしまう物語を見よう。イスラエル民族の壮大な集約であり遺産である旧約聖書の士師記11章に出てくる、ある女の物語である。彼女の名はわからず、ただ父の名で「エフタの娘」と呼ばれる。こういう例は新旧約聖書を通じて一貫した現実である。聖書に出てくる女で、名が出てくるのは、男と比べて非常に少ない。これは、だれかの「お嬢さん」「奥さん」「お母さん」と呼ばれて、名が呼ばれない現代日本の女の現状とも一致している。私的な関係にある男の財産のように女が呼ばれる習慣が今も続いている。

この娘の父エフタは自分の名誉を上げる機会となるアンモン人との一生一代の戦いに勝つために、神に向かって次のような誓いを立てた。

『もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら、わたしがアンモン人との戦いから無事帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献(ささ)げ物といたします。』⁽⁹⁾

このときエフタは、まさか自分の愛する一人娘をいけにえとすることなど、夢にも考えていなかっただろう。たぶん、使用人(召使)の一人を殺すことになると思っていたのかもしれない。当時の人権意識や常識のほどが、ここからよくわかる。わたしたちがどのような民族に属しているかと、人間であるかぎり、こういう古代人の歴史を共有している。

しかしながら、当時でも個人の責任は逃れられない。エフタが取った責任は、たとえ娘を犠牲にしなければならぬとしても、自分がした誓約は曲げられないというものだった。名誉の方が最愛の家族の命より大事だった。こういうことは歌舞伎や人形浄瑠璃の題材として事欠かない。君主のために親が子を犠牲にすることは、むしろ誉められているのが封建社会の常識だった。

そしてエフタの娘はこの結果を甘んじて受けたのだ。士師記の文章では、彼女が2ヶ月間、女友だちと共に悲しんだとあるが、その理由が処女のままで死ぬということだったという。男に属する者となる(結局、父から夫へ)以外、当時の女には自己実現の方法がなかったことが伺える。その他の方法で処女を失うことは恥じ(売買春)であって、社会からまた別のレベルで疎外されたのだ。

現代に生きるわたしが、エフタの娘の立場で考えたとき、親の名誉のために殺される前に、自分が処女であることを最も悲しむとは考えにくい。今の若い女たちなら、自分がやりたかった

ライフワーク、留学、旅行ができなくなることが思い当たるに違いない。現在、結婚は女にとって、リストの後ろの方に来始めている。

聖書物語に戻ると、いずれにせよ女の人生の充実は夫との性的な関係、結婚以外にはないということを前提にした書き方である。エフタの娘は実際、自分が処女であることを最も悲しんだのだろうか？ ほんとうにそうであれば、せめて死ぬ前に結婚することも可能だったろう。たぶん人々は、若い女が男に「使われる」前に死んでいくのを惜しんだのだろう。

創世記22章に出てくるアブラハムの息子イサクの物語と、この物語を比べてみると、ジェンダーの問題がよくわかる。この有名な物語は当時広く行われてきた人身供養の習慣が、廃止されていく過程を示している。神はそのような献物は受け取らないのだという新しい神概念を、刃物を振り上げてイサクを殺そうとするアブラハムを天使がいさめるという筋書きで表現している。こうして男の後継ぎであるイサクの命が救われた。⁽¹²⁾

ところが、エフタの娘の場合には、自分の名誉に凝り固まって誓いを取り下げることができないエフタを、いさめる天使の姿はない。女の子が殺されるのは、仕方がないこととして見過ごされるのだろうか？ 旧約時代、神の祝福と約束のなかに、女は含まれていたのだろうか？

どのようにしたら、エフタの娘の死は防げたであろうか？ 彼女と、彼女を取り巻くコミュニティとに、何が起こる必要があったのか？ わたしは最初のステップとして、娘の死の責任が父にあることを認めるべきだと思う。だれをいけにえとして献げたとしても、彼は自分の大きな過ちを認めるべきであろう。

彼の屈折したかたくなさについては彼の経歴が参考になる。「めかけ」の息子として、エフタはギレアドにおいて義理の兄弟たちから仲間はずれにされ軽蔑されていた。エフタはトドの地にのがれ、そこでならず者たちと徒党を組むようになる。⁽¹³⁾ そういう意味では、彼も男の権利優

先社会における結婚制度の被害者である。その制度は男が多く妻を持つことを大目に見るからである。エフタが拒絶された存在であったことを理解し、悩める感情を解きほぐしてやれる人はいなかったのだろうか。彼が自分の弱さを見ることができないのは残念である。むしろエフタは悲しみを隠して強がっている。ギレアドの長老たちが、アンモン人と戦うために司令官になってほしいと彼に頼みに来たとき、エフタはこの機会を自分の意地を見せ付け、恨みを晴らすために利用しようとしている。⁽¹⁴⁾

エフタは戦争の勝利を祈って誓いを立てたとき、決して失敗はできないと感じていたのではなかろうか。失敗を極端に恐れる人生を送る彼にとって、勝利した今、たとえ最愛の子を殺してでも、神の前で自分の誓いの誤りを認めることができなかったのだろう。エフタはあくまでも自分の面子を守ろうとするから、かえって娘を責めている。凱旋して帰って来た最愛の父を一刻も早く見たいと、娘は家から喜んで小躍りしながら、飛び出してきたのである。しかし、父は娘に言う。

「ああ、わたしの娘よ。お前がわたしを打ちのめし、お前がわたしを苦しめる者になるとは、わたしは主の御前で口を開いてしまった。取り返しがつかない。」⁽¹⁵⁾

神はほんとうにそのような犠牲を望むのだろうか？ エフタが抱いている神のイメージが間違っているのではないのか？ 彼が神と語る仕方、人々や家族とかかわるコミュニケーションの仕方が誤ってはいないのか？ 旧約聖書の別の書物、「詩編」の中で、自分の罪を悔いたダビデ王はこう言っている。

「主よ、わたしの唇を開いてください。この口はあなたの讚美を歌います。もしいけにえがあなたに喜ばれ、焼き尽くす献げ物が御旨(みむね)にかなうのなら、わたしはそれをささげます。しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を、神よ、あなたは悔(16)られませぬ。」

ブライドにしがみつくなり、神が人間の至らなさを理解する神なのだ信用できない人間の方に問題がないだろうか。特に野心を競う男たちが、打ち砕かれ悔いる心になって、不必要な殺人をやめなければ、女や子ども、そして男も、いろいろなレベルで生き残ることができない。

ジャン・L・リチャードソンは、エフタの娘の物語を、現代的な感覚で書き直しているのだから、それを見てみよう。それはエフタの娘の親友が語る形を取っている。語り手である「わたし」はエフタの娘を「ミアム」と呼ぶ。ミアムが「わたし」に、2ヶ月の猶予を父からもらったと言う。友だちといっしょに「処女のままであることを泣き悲しみたい」という、せめてもの願いがかなえられたのだと語る士師記の本文を、リチャードソンは次のように書き変えている。

「わたしは大きな恐れの中にかかかわらず、おかしさに吹き出すところだった。わたしはミアムが何かを泣き悲しむところなど見たことがなく、ましてや自分が処女のままであることを嘆くなどということが信じられなかった。ああ、ミアムは何と多くの町の男たちに賞賛され、何と多くの母や父たちが、偉大なエフタ司令官の一人娘である彼女を、息子の妻に所望したのか。でも、彼女はそんな申し込みに笑い飛ばし、自分の独立を犠牲にして人の支配下にやすやすと入ったりはしないと書いていたのよ。そして、何よりも子どもを産むことがどんなに危険かを彼女はわかっていたわ。ミアムの母は彼女を産み落として死んだのよ。母と同じような目に合いたいなどという望みは、これっぽちも持っていないのがミアムだわ。でも、2ヶ月の自由だなんて、やはり彼女はやるわ。(逃げ出すための)すばらしい口実になるに違いないもの。」⁽¹⁷⁾

このようにして、リチャードソンはこの悲劇的な物語を、ミアムの立場に立って、神の恵みが表れる物語に解釈し直している。「わたし」は続けて言う。

『なぜなの、ミアム？』わたしはもう100回も同じことを尋ねている。『家に帰るなんてとんでもないわ。エフタがこの馬鹿馬鹿しい誓いをヤハウエ(神の名)に対して立てたのであって、あなたではないのよ。あなたが責任を取ることではないわ。家に帰るのは道理に合わないわ、ミアム…』

ミアムが答えて言う。「わたしには道理なんて一つもないのよ。少なくともいい道理は見つからないわ。説明できないもの。もし、誓いを破ったら、父がどうなるかっていうことを、わたしは恐れているの。わけがわからないと言ったわね。その通りよ。あなたが正しいわ。でもね。わたしが生き延びたとしても、この先どんないいことがあると言うの？ 結婚して、子どもを産んでという、人の期待に応えたとしてね。わたしの母はそれで死んだのよ。もし、わたしを産んで死ななければならないとしたら、母が結婚を望んだかどうか。でも母には他に選ぶものがなかったんでしょ。今度のことには、少なくとも選択の余地があるわ。これはわたしの選択なのよ。」⁽¹⁸⁾

ミアムは単なる犠牲者ではない。彼女は父の肩を持つことを選んだサバイバーである。たとえ彼が神に対して愚かな誓いを立ててしまったとしても、彼女はそれを許し、自分で父の誓いに従うことを選んだのである。しかし、彼女は悲惨な選択によって、当時の女にとって虐待であった体制に屈服することになる結婚から自由になることができたのだ。ミアムの友だちすべては、つらく難しいと感じたが、彼女のこの勇気と愛にあふれた選択を支持した。

こうしてミアムは死んだわけであるが、その後、援助グループを形成した彼女の友だちの思い出に生き始める。そのなかで女たちは自分自身の境遇を嘆いて泣くことができたのだ。士師記の記者(男)は次のような興味深いコメントを付け加えている。

「2か月が過ぎ、彼女が父のもとに帰って来ると、エフタは立てた誓いどおりに娘をささげた。彼女は男を知ることがなかったのだから、イスラエル

に次のようなしきたりができた。来る年も来る年も、年に四日間、イスラエルの娘たちは、ギレアドの人エフタの娘の死を悼んで家を出るのである。⁽¹⁹⁾

この聖書物語の語り手は、女たちが作った習慣を無視することはできなかつたのではなからうか。当時、男に従う結婚の形態の中にしか、自分の人生の実現がかなわなかつた女たちが、そうではない形態を社会的な運動として造ることができた例と言えようか。女たちは自分たちの無力を受け容れて、涙に真実を見出した。負けたように見えるが、実は逆説的に勝つたのである。女たちだけで集まるというしきたりを村落共同体のなかに造つたのだ。私的に小さく限られた領域にしか居場所がなかつた女が、集まって力を結集することで、社会的な居場所を作つたというわけである。

そのような居場所の中心にあつたのが、エフタの娘の記憶であつた。このような援助グループで、女たちはパンを裂き、ぶどう酒を飲むことができる。ちょうど最初のクリスチャンたちが、パンとぶどう酒を分かち合つて、イエスの死を記念し復活を信じたように。それはどのような食べ物であってもよい。分かち合うことによって、わたしたちの記憶のなかに、何度も何度もエフタの娘をよみがえらせ、イエスの復活を確認することができる。

5. 結婚というものの全体像：

女が提案するパートナーシップ

ジョイを産んで死んでしまつたアクーナの場合、彼女が破つたタブーばかりでなく、社会(村落共同体)全体として人々が信じたこととその態度全般が、結婚のなかで彼女を死なせてしまつたのではなからうか。父を亡くしたとき、彼女はまた母であるマー・ブラッキーをも亡くしたと感じた。マー・ブラッキーはすぐアクーナの叔父の妻の一人になつたからである。アフリカでまだ行われているこのような結婚は、旧約聖書の時代にもあり、レビラート婚と呼ばれた。これは

夫を亡くした妻に対する福祉とも考えられる制度で、夫の兄弟がその「未亡人」を妻にすることによって、その子どもたちを社会的経済的に守るのである。むろん女の意志は考慮に入れられないのでことだが。

母が叔父の妻となつて、人々は安心するが、アクーナは守られたであろうか？ 彼女はそうは感じていない。まるで一挙に自分のアイデンティティがもぎ取られたように感じている。どこにも属していない恐怖が彼女を襲っている。彼女の新しい義理の父は、すべての社会的な約束事を果たしきつた満足感にひたっており、新妻になつた元兄の妻とその娘が、自分の財産となつたことに何の疑問も抱いていない。正しいことをした、女たちを救つてやつたと思つていことだろう。しかし、アクーナは孤独感と深い悲しみのなかに落ち込み、チーケ以外に心を開いて話せる人がいなかった。男である義理の父と、女であるアクーナの感じ方の間には、こんなに大きな隔りがある。男の権利が優先される社会では、男の気持ちの方が大事にされてものごが進み、女の気持ちや都合は無視される。

チーケはアクーナを深く愛していたが、彼はこれまでに他の男の妻たちと多くの性的な関係を結んでいた。それは反倫理的なことではなかつたからである。処女性が尊ばれる建前と、だれもが嘘で塗り固める本音のギャップだろうか。チーケもまたアクーナの気持ちを大事にできない。結論を言うと、彼は彼女の初潮が待てなかつたのだ。16歳にはなつていたものの、心理的なショックで彼女はまだ初潮を見ていなかった。医者がチーケに言うには、彼女が妊娠するのは早過ぎたのだつた。彼女の身体はまだ成熟していなかつたのだ。

さらにチーケに感謝するあまりの働き過ぎが、アクーナの身体を蝕んでいった。彼女は家族全部を愛した。死んだ父、母、弟、そして夫を。だから自分が持っていると思つたものすべてを献げ尽くした。今まで彼女に、自分のために力を残しておくように教えてくれた人は、一人

もいなかったのだろう。

この暗く悲しい物語に希望はあるのだろうか？ わたしは彼女の娘「ジョイ」にその希望を見出す。わたしはジョイが、出産のときに死んだ母とは全く違った人生を送る可能性を見る。ジョイの父であるチークは、悲しい思い出のあるイブーサには、ジョイを行かせないかもしれない。しかし、ジョイは自分のルーツを探するため、母の村を訪れるだろう。ジョイが何か力になるものを見つけて、今日もまだあるタブーに対抗できるかもしれない。彼女はまた、祖母であるマー・ブラッキーから、違う視点のアクーナの話聞き出すだろう。アクーナが自分で夫を見つけ、プライド・プライスなしで逃げることを選んだことに対して、イブーサの人々はもう一度この古いタブーを建て直したのであるが、マー・ブラッキーやジョイが、チークや、アクーナの弟といっしょに、それに対して「ノー」(否)と宣言し直すことができる。すなわち、アクーナは自分の選択を後悔しておらず、その人生を深く受け容れて満足したのだと。もし若い女たちがこの勇氣あるパイオニアの足跡に従い、男たちがそれを支持するなら、新しい時代が来るのである。

もう一つの悲劇「アノワ」においては、コフィもアノワも自殺してしまうわけであるが、人々は男のコフィを「食べ物にした」と言って、女であるアノワの方を責めた。同じことをしても、卑しめられるのは女である。しかし、語り手である「年寄り」はこう言う。「アノワはよい女であったかもしれんよ。よい人間であったかもしれんのだよ。もし、われわれがこんなふうでなかったらな⁽²⁰⁾あ。」

アノワの選択は「自分に真実になった」ということだったのであって、あきらめではなかったと思う。彼女は単に自分を犠牲にして、金持ちとなったコフィに仕えたのではない。彼女は独立した考えを持つ人間として立ち、コフィとの真実のパートナーシップを望んだのである。もし彼が自分の本当のアイデンティティを認めることができたなら、彼もまたアノワが差し伸べた招きに答えただろう。なぜなら、妻と夫はまず親友

であるからだ。

つうの物語では、彼女がほんとうに多くを献げた男から飛び去るという情景が、女が長く苦しんだ後に到達できる、素晴らしい解放のメタファーとなる。人間の身体から鶴の身体へと変容していく姿は、死人からの復活というイメージとして捉えることができる。つうは死に対して「ノー」と言うことができたのである。

復活とは、新約聖書が書かれた動機となった信仰で、イエス・キリストは罪なくして殺されたが、神が彼をよみがえらせたと言う。これは死に対して「ノー」と宣言した神の愛の力であると。

イエスの復活を最初に証言したのは、女たちであったと、四つの福音書がみな口を揃えて言う。女たちは自分の経験を彼の十字架⁽²¹⁾上の死と重ねあわせ、イエスの生き様を、死に対する神のノーであると解釈するメッセージをもたらしたのである。イエスの苦難を通して神のノーを見ることができるならば、わたしたちはまた女たちの解放を通して、命に対する神の「イエス」(肯定)を見ることができよう。もし歴史を通して女たちが家父長・父権制社会の制度のなかで死んできたならば、彼女らは引き揚げられ、キリストにおいて復活し、生きる者となるに違⁽²²⁾いない。

復活したつうが人間のところに舞い戻ってくるかもしれない。今度は人間に助けてもらった負い目を感じずに。わたしは新しく生まれ変わったつうを想像する。彼女は与ひょうのような男に従順に仕える妻にはもうならないだろう。彼女はいい人を見つけてもう一度結婚するかもしれないし、そうでなくても自分の毎日の歩みを分かち合える、男女のよい友だちを持つだろう。しかし、つうは自分の人生を生きることに自由である。彼女は自分の羽を引きぬかず布を織ることを考案し、機織教室を開いたりするのではなかろうか。美しい布は人々の心に希望を与えることだろう。彼女はまた、村を出たことのない人々に、町の暮らしのリアリティを話して聞かせるだろう。自然と生きとし生けるものと

が共存するための本を、彼女は書くかもしれない。彼女はまた村の子どもたちとよく遊び、どのようにして助け合い、どのように公平にお互いを扱うかを教えるだろう。彼女は男を愛し、女を愛し、子どもたちを愛して、思いやりのある共同体というものがどのようにしたらできるか、その苦勞に参加して、共に泣きながら、だれをも援助するだろう。

でも何ととっても、つうは自分自身になりたいときは、強く美しい翼を広げて、いつでも空高く舞い上がって行くことができる。そのような賢く、しなやかで自由なつうを、だれも留めることはできない。

[注]

- (1) 後に本文でも取り上げるが、これは旧約聖書にも出てくる「レピラート婚」と呼ばれ、女の夫が死ぬと、その兄弟が女を妻にした。女は男の家族の財産だという感覚が伺われる。ただし、女や子どもが路頭に迷わないための、古代の福祉制度とも取られる。もちろん、女の意志は考慮外にある。
- (2) 参考文献 Emecheta, p.168.
- (3) 参考文献 木下 p.62f.
- (4) 参考文献表ハムによると、「家父長制、父権制」とは、「父親であること、家父長制が依存している男系による血統の概念。フェミニズム理論では、父性の再生産のプロセス(あるいはその欠如)は男性の歴史的実践と相互依存적であると論じる。父性は、母性のような経験を通じた自然界との関係ではなく、原因・結果に依存した観念である。メアリー・オブライアンは、男性を制度的婚姻と個人的領域の確保に駆り立てるのは父性の不確かさであると示唆する。男性たちは、生物学的連続性を確認できないことを補うために、社会的代替物を構築しなければならない」とある。
- (5) 参考文献, Emecheta, p.149.
- (6) ガーナ出身の教授(Mercy Amba Oduyoye)の授業を、サンフランシスコ神学大学の、中米スタ

ディー旅行セミナーで取ったとき聞いた話である。ガーナでは、結婚した夫妻に子どもが生まれない場合、早い段階に妻はだれかによって妊娠が可能かどうか、試験されることは許された行為なのだそうである。この際だれの子ともかよりも、夫妻に子ができるかどうかの体裁の方が優先すると言う。

- (7) 参考文献 Oduyoye, p.141.
- (8) 旧約聖書には、子どもが生まれない夫妻が、妻の主導で、もう一人の妻を得させる話がある。アブラハムとサラの場合である。(創世記16章)
- (9) 旧約聖書の創造物語には、「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」(創世記1章26節)とあり、人間の靈的な能力が、神のイメージから来ているというふうには解釈する。この考え方は、ユダヤ教から枝分かれたキリスト教とイスラム教の宗教文化に多大の影響を与えている。
- (10) 旧約聖書 士師記 11:30~31
- (11) 士師記 11:37
- (12) 創世記22章1~14節
- (13) 士師記 11:1~3
- (14) 士師記 11:6~11
- (15) 士師記 11:35
- (16) 詩編 51:17~19
- (17) 参考文献, Richardson, p.140.
- (18) 参考文献, Richardson, p.141
- (19) 士師記 11:39~40
- (20) 参考文献, Aidoo, p.64.
- (21) マタイ28章, マルコ16章, ルカ24章, ヨハネ20章。
- (22) 使徒パウロは、イエスを直接知らない。その死後活動し始め、最初にイエス・キリストの復活の神学を打ち立てた人物である。初代の教会ではこれをキリスト教信仰の拠点とした。次の箇所は、パウロが書いたもので、ユダヤ教の背景を基礎に、キリストの復活を普遍的な死者の復活と結び付けている。つまり、復活はイエスに起こったことで終るのではなく、それを信じるわたしたちも復活するということを、生活のいろいろなレベルで経験できる

ことだと説いている。

「キリストは死者の中から復活したと、宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずですよ。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」(コリントの信徒への手紙一 15:12~14)

[参考文献]

Aidoo, Ama Ata

1970 *Anowa*. London: Longman Group

Emecheta, Buchi

1976 *The Bride Price*. New York: George Braziller.

Oduyoye, Mercy Amba

1995 *Daughters of Anowa - African Women and Patriarchy*. New York; Orbis.

Richardson, Jan L.

1995 *Sacred Journeys: A Woman's Book of Daily Prayer*. Nashville: Upper Room Books.

木下順二

1998年 『夕鶴・彦一ばなし』 東京:岩波文庫

新共同訳 旧新約聖書

1993年 日本聖書協会編

ハム, マギー

1995年 『フェミニズム理論辞典』 東京:明石書店